

ゆかいな三人組 たんてい^{たん}団



933 Sharmat, Marjorie Weinman
(NDC)

ゆかいな三人組たんてい団

マージョリー＝シャーマット 著 生田信夫 訳

学習研究社

188p 図 23cm (新しい世界の童話シリーズ)

原題: THE SPY IN THE NEIGHBORHOOD

・ッル-いな三人組たんてい団

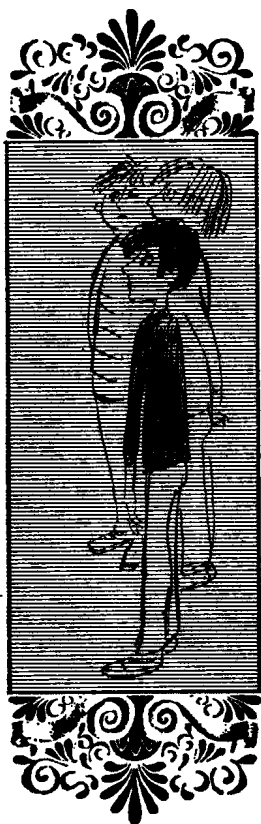
マージョリー=シャーマット作

生田信夫訳

リゼル=ウェイル画

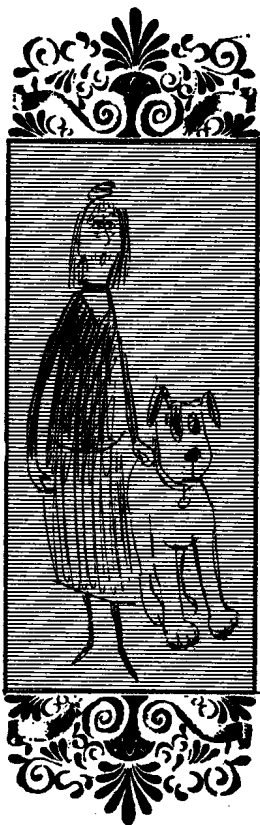
THE SPY IN THE NEIGHBORHOOD





ゆかいな三人組たんでい団 もくじ

- 1 リチャードソン夫人はスパイだ!..... 5
- 2 たんでい集合 うわーお!..... 17
- 3 おしゃべりステラの嘆願書..... 28
- 4 弁護士にあいに、ニューヨークへ..... 41
- 5 エンブルさんはいい人だったけど..... 70
- 6 調査官は朝五時におきる..... 95



- 7 茂^{しげ}みにかくれて……………105
- 8 あとをつけるのはむずかしい……………117
- 9 ひみつをまもるのも、たいへんだ……………147
- 10 さあ、証拠^{しょうこ}を……。『一、二の……』……………155
- 11 スパイはどっちだ……………163
- 12 それから、ぼくたちは……………182

THE SPY IN THE NEIGHBORHOOD

by Marjorie Weinman Sharmat

Text Copyright ©1971 by Marjorie Weinman Sharmat

Illustration Copyright © 1971 by Lisl Weil

Japanese translation rights arranged with

Macmillan Publishing Co., Inc. through

Japan UNI Agency, Inc. Tokyo

●訳者のご紹介

東京大学教育学部を卒業後、放送作家になり、『みんなで遊ぼうピンボンパンの』構成などにたずさわる。文筆活動としては、子供向けの著書に『ロビン＝フッドの冒険』、訳書に『おばけのボロジャグチ』『なかなかおりの学芸会』などがあります。

Ⅰ リチャードソン夫人はスパイだ！

学校は、あしたからはじまる。そしたら、国語（英語）のネイスン先生は、最初の時間に『夏休みをどうすごしたか』という題で作文を書かせるだろう。そうにきまつてるんだ。三年つづけて、おなじ題の作文を書かされることになる。『ぼくが先生だったら、もつとべつな題を考えるんだけど……。だって、男の子は大きくなればなるほど、夏休みをどうすごしたかなんていうことは、その人だけの問題で、先生にはあまり関係のないことになっていくのだから……。』

たとえば、ことしの夏休み——七月十二日までのことなら、ぜんぶまとめて、二、三行で書いてしまえる。でも、そのあとの週のことを書こうとしたら、ペンだこができてしまふだろう。たぶん、ぼくは、その一週間のあいだに、すこしはりこうになったにちがいない。だから、そのてんでは、先生の氣にいる作文になるかもしれない。

でも、その週、ボールのせいで、ぼくたちは、めっちゃめっちゃなことをしでかすことになったんだ。ネイスン先生は、なんでもきちんとしているのがすごい女の先生で、めっちゃめっちゃなことは大ざらにだっているのに……。

ぼくたちがあんなめっちゃめっちゃなことをしたのは、百パーセント、ボールのせいというわけではないかもしれない。でも、九十パーセントは、ボールのせいだといっていいだろう。まず、ボールについて、説明しよう。

ボールは〈天才少年〉で、知能指数が百五十ぐらいある。だから、おかあさんたちはみんな、自分の子どもをボールといっしょに遊ばせたいと思っている。ボールの頭のよさが、いくらかでも自分の子どもにうつるかもしれないと思っている……。おかあさんたちがさせたいことは、たいてい、子どもたちがいやがるものだけど、子どもたちも、ボールといっしょに遊びたいと思っている。ボールは、いろんなことを思いついて、それが、たいていおもしろいことだからだ。

ボールの両親は、ボールが大きくなったら、研究室にとじこもって、ほこりにうずも



れ、ひげが床までのびるような生活をし、へなへなの、
友だちがひとりもないような人間になるのではないかと、とても心配している。そして、そうならないように、ポールにへからだのためになる、みんながするようなこと（両親がこういつてるんだ）を、させたがっている。だから、ポールは、フットボールをしたり、ドラムをなったり、アルバイトをしたりしてるんだ。

そのアルバイトのことで、ポールは、リチャードソン夫人にあった。そして、ポールがリチャードソン夫人にあったことで、めっちゃめっちゃなさわぎがはじまることになってしまった。

リチャードソン夫人は、数週間まえに、ポールが住んでるスズカケ通りにひっこしてきたばかりだった。その

へんは、都会からずっとは
なれたところだということ
をはっきりさせるために、
どの通りにも、植物や湖
の名まえがついてるんだ。

ポールは、リチャードソ
ン夫人の家のベルを鳴らし
て、なにか仕事はないか、
ときいた。リチャードソン
夫人は、ポールをじろじろ
ながめてから、家の中にま
ねきいれた。そして、そこ
にあったダンボール箱にす



わるようにいった。そのダンボール箱の中には、大きな白いニワトリがはいていた。

「わたしは、リチャードソン夫人。そこにいるのは、ミス・アメリカ。」

と、リチャードソン夫人がいった。

「おあいできて、うれしいです。」

ポールはそういつて、ダンボール箱の中をのぞいた。ミス・アメリカが、コッコッと鳴いた。

「友だちがきたので、喜んでるのよ。」

と、リチャードソン夫人がいった。

「ぼくは、ミス・アメリカの家にすわってるわけですか？」

ポールがきくと、リチャードソン夫人がいった。

「それは、仮りの家。りっぱな小屋を、ちゃんと注文してあるの。たいていは、小屋の中になんかいませんけどね。でも、家があったほうが、中と外がはつきりするでしょう。子どもは、外で元気に遊ぶものだから……」

「子ども？」

ポールが、また、きいた。

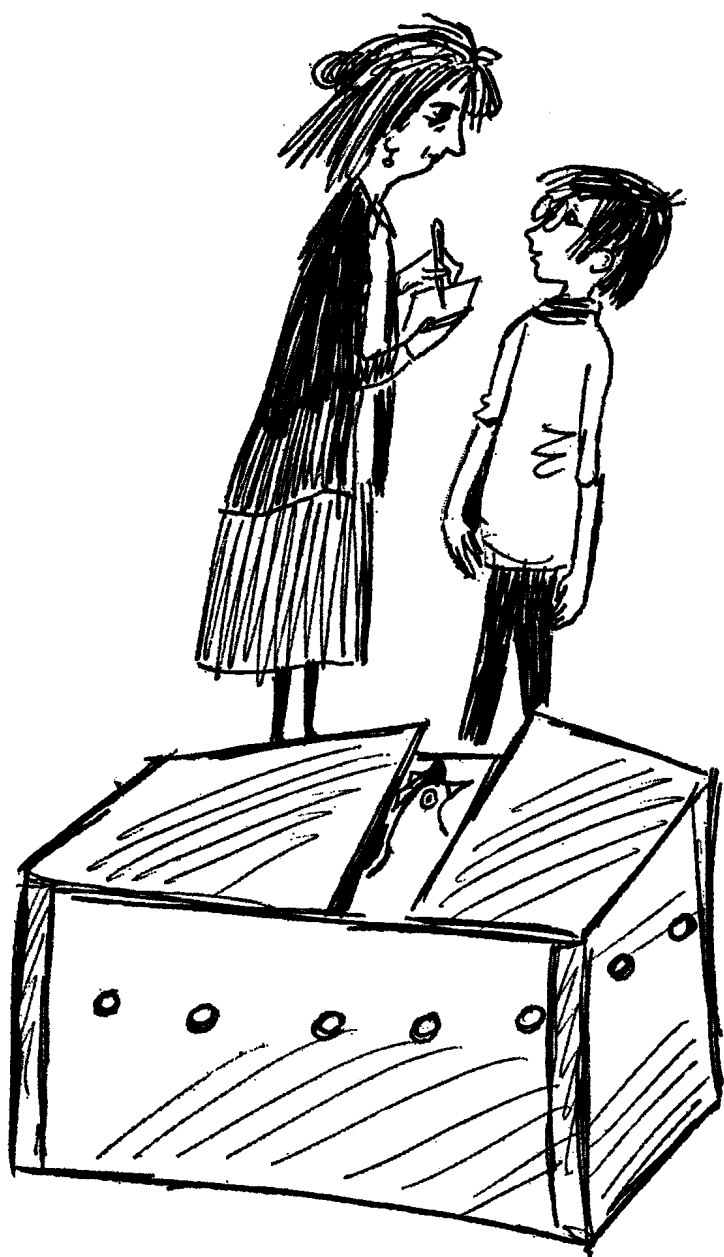
「ミス・アメリカは、まだ、子どもなのよ。どんどん大きくなってますけどね。もうすぐ、たまごをうむようになるでしょうよ。この子がくじであたったときは、まだ、ほんのあかちゃんだったの。一等賞のテレビからかぞえて十三番めの賞品だったけど、いちばんいい賞品だったわ。」

そういつて、リチャードソン夫人は、きゆうに立ちあがった。ポールも、立ちあがった。リチャードソン夫人は手帳をだして、質問しはじめた。

「あなたのお名まえは？」

「ポールHボッツです。Hは、なんの頭文字か、まだきまってないんです。ぼくが二十一歳になったら、自分で好きな名まえをえらべるように、両親がHとだけきめてくれたので……。いまは、ホレイショーかホリスにしようと思ってますけど。」

「体重は？ ポール。」



「三四・五三キロ。朝、はだかではかつて。」

「身長は？」

「頭をきちんととかして、一四三・五センチ。」

ポールが答えると、リチャードソン夫人はいった。

「はい。けっこう。うちの犬のメルビンを、一日に二回散歩させるっていう仕事は、どうかしら？ 朝一回、午後一回。仕事は、来週から。でも、そのまえに、一回練習してもらわなければならぬわ。あしたの午後がごろがいいんだけど……。練習のときは、一日五十セント。仕事になってからは、一日一ドル。それに、特別なことをしてもらったときには、すこしたしてあげるわ。」

「現金ですか？ それとも、小切手で？」

ポールがきいた。

「もちろん、現金よ。小切手なんかもらったら、どうするの？」

「銀行の、ぼくの口座にいます。そうすると、年に五・五パーセントの利息をつけてく

れるんです。三か月ごとですけど、きちんと、あずけた日から計算して。もつとくわしく説明しましょうか？」

ポールがいうと、リチャードソン夫人はいった。

「わたしは、銀行を信用してないの。わたしのお金は、ほとんど、株式市場にまわしてるわ。そのほかは、クッキーのかんにいれとくの。それでなんの不自由もないわよ。でも、こんなこと、あなたにはまだわからないでしょうね。」

じつは、ポールは、株式市場のことをよく知っていた。もちろん、クッキーのかんのことも……。でも、ポールは話をさきにすすめたかったので、つぎの質問にうつった。

「なぜ、ぼくの身長や体重をきいたんですか？」

「そういう数字をきちんと知っておくことが、とつてもたいせつですからね。たとえば、メルビン^{メルビン}は、体重が四十八キロぐらいあります。あなたより十三キロ重たいわけね。そのうえ、どんどん大きくなっています。たっぷりえさをあげてるから。ニワトリを食べてしまわないように、ね。でも、あなたの背の高さと、アルバイトをさがしてまわるような積

極きよく的な態度たいどを考かんえて、あなたに、この仕事しごとをおねがいすることにしたんです。メルビンがあなたをころばしちゃうことがあるかもしれないけど、わるぎがあるわけじゃないから、がまんしてね。これで、あなたの質問しつもんに答こたえたことになったかしら？」

「ええ。ぼくが知しりたいと思おもってた以上いじょうのことがわかりました。ぼくはフットボールもするし、ドラムもならってるっていうことも、お知しらせしときます。それから、髪かみの色いろは、明あかるい茶色ちやいろで、夏なつになると、くすんだ金髪きんぱつのような色いろになるということ……。それから、ぼくは、耳みみをびくびくうごかすことができるけど、ふだんはそんなことはしません。この歯はは、みんな、入いれ歯ばじゃありません。」

「知しりたいことは、もう、みんなわかったわ。じゃ、話はなしがまとまったのだから、コーヒーでもいれましょう。あなた、コーヒーはのむ？」

「そのことについて、両親りやうしんはまだはっきりした意見いけんをきめてないんです。」

ポールがいった。

「わかったわ。じゃ、あなたは、ココアにしましょうね。」

そういつて、リチャードソン夫人は、コーヒーとココアをいれに、台所へいった。ポールは、へやの中を見まわした。そのへやには、リチャードソン夫人の性格がよくあらわれていた。家具のほとんどは、つかいこんであるというのか、古びているというのか、おかあさんがへなじんできいるというようなものだった。

くずかごの中には、ニワトリの羽が、いっぱいはいっていた。あちこちに、ノートがちらばっている。いままで、犬を散歩させてくれる人がいなかったの、リチャードソン夫人は、かたづけするひまがなかったのだらう、とポールは思った。外国の切手をはって、外国のスタンプがおされている手紙のたばがあった。

けれども、それよりもポールの興味をひいたものがあつた。かくしてあるみたいになへやのすみにおいてあるものに、ポールは気がついたのだ。それは、短波の無線機だった。どうして、リチャードソン夫人は、短波の無線機なんかもつてののだらう？ ポールは考えた。そして、たくさんのノートや、外国からの手紙、それに無線機を、いっしょにして考えてみた。そのしゅんかん、ポールは、リチャードソン夫人はスパイだ、という結論にた